

周程

本論文は、近代東アジアの近代科学技術に基づく啓蒙思想の成立と発展について論じた力作である。

周程氏は、まず、西欧近世の啓蒙思想と後発の東アジアにおける啓蒙思想を比較し、19世紀中葉以降の中国と日本の啓蒙思想研究の意義について述べ、東アジアで最初に伝統的な儒教思想を全面的に否定し、近代科学的理性に基づいた福沢諭吉における科学啓蒙思想成立から中国の新文化運動の指導者陳独秀を比較する研究方向を打ち出す。

本論文の前半部分は、福沢諭吉の自由思想（ないし独立思想）、科学思想、その転回について議論している。福沢が東アジアで儒教思想を否定し、近代西欧思想を採用することに踏み切った学問史的意義を高く評価し、その科学思想の内実を丸山眞男らの先行研究により、あるいはそれをも乗り越えて理解しようとする。『学問のすゝめ』や『文明論之概略』には、批判的知性の思想的核ともいえる懐疑主義思想もが盛り込まれていることを確かめている。しかし、朝鮮や中国など対外関係では、早くから科学技術を利用した「帝国主義的」侵略の芽もが胚胎していたことを確認し、その点で、啓蒙主義的理想主義が晩年まで保持されていたと論断していた丸山の認識が不十分であることを指摘している。

福沢の議論に付随して、近代的語彙としての「科学」、「物理学」などの成立を中国語・日本語の発展史の中に位置づけている点も独創的な貢献である。

後半の陳独秀に関する議論では、陳が唱えた「民主」と「科学」の思想的意味が被抑圧民族に依拠した民主主義思想であり、また迷信などに抵抗する思想が科学思想の中核をなしてしたことを確認し、その意義は、陳が1920年にマルクス主義に転換してからも深まっていったと論定している。科学と倫理学の相互連関、優劣について論争しあった「科学と人生観」論争の分析も、これまでの日本では紹介されてこなかった論点である。

全体として、福沢の科学啓蒙主義が中途挫折で終わっているのに反して、陳の「民主」と「科学」の概念が現在でも生き続けていると結論している。

本論文の独創的貢献をもっと詳細に述べれば、以下のとおりである。

(1) 福沢諭吉の啓蒙思想の意義と限界を、後発の陳独秀の思想と比較して論じ、一般に、近代日本の科学技術を取り巻く学問史的状况を明解に論じたこと。

(2) 陳独秀の民主主義思想の普遍的意義を確認し、近代中国での科学と伝統倫理思想との相克の様相を明らかにしたこと。

本論文は、日中の代表的科学啓蒙思想を比較史の方法で解明しようとした学問的先鋭さ、学問的意欲の点で際立っている。単行本として中日双方で公刊すべき業績であると認められる。さらに彫琢すべき論点は多様であるが、それは学位取得後数年間の学問的課題とすべきであろう。審査委員全員は、本論文をもって学位取得のためには十分であると判断し、周程氏が中国・日本を中心とする東アジアで第一線に立ちうる科学史家であると判定した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。